



長編小説

狂った脂粉

梶山季之

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 狂った脂粉

昭和41年2月15日 初版発行

昭和51年10月15日 50版発行

著者 ^{かじ}梶 ^{やま}山 ^{とし}季 ^{ゆき}之
東京都新宿区市谷仲之町38
季節社ビル
出版権者・季節社
発行者 小保方 宇三郎
印刷者 盛 照 雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Tosi yuki Kazi yama 1966

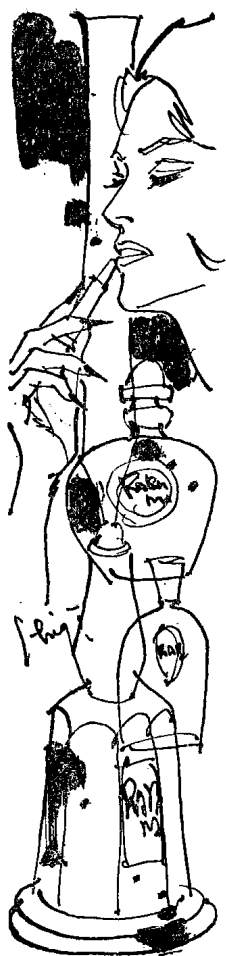
(分)0-2-93(製)02104(出)2271 (0)

狂^{くる}った脂^し粉^{ふん}

かじ やま とし ゆき
梶山季之



カッパ・ノベルス



目次

就職の条件	5
上陸作戦	29
さあ出発!	50
隠し番号	71
燕買い	92
皮膚を焼け	113

113 92 71 50 29 5

あの手この手	135
童貞を捨てろ	154
暴行作戦	175
嗅ぎつけた罠	194
変更指令	213
上陸成功	233

233 213 194 175 154 135

本文のイラスト

横塚
繁

就職の条件

「あーあ、嫌になったなあ、まったく！」

——壬生源太郎は、生欠伸しながら、コップの底に残った氷の塊を、丈夫な歯で噛み砕いた。
高円寺のトリス・バーのカウンターである。

「ちえッ、また始めやがった！」

同僚の市毛一夫が、ピーナツをつまんで、マダムにウイंकをしてみせた。

「お代わりなさる？」

マダムは愛想よく二人に笑いかける。

「今日は、市毛の奢りだから、ジャンジャン飲ませてもらおう……」

壬生はにこりともせずと言った。

「可愛気のない男だよ、こいつは！」

市毛一夫は、あきれたように笑ったが、すぐ真顔にもどって、

「まア、今夜は飲もう！」

と言った。

「なにかおもしろくないことがあったの？」

マダムが二人の前にやって来た。

六人はいれば満員になるような小さな酒場だから、カウンターの中は狭い。バーテンとマダムの二人で、身動きがとれないのだ。したがってバーテンとマダムが位置を変えるのも、なかなか大変であった。

「おもしろくないことだらけさ！」

壬生源太郎は、吐き捨てるように言った。

「そりゃア、どこだっておもしろいことないわよ……。いうなれば、黒犬ね」

「黒犬？」

「尾も白くない……。オモシロクナイ。わかった？」

「ちえッ、江分利満えぶりまんの優雅な生活だろ？ 映画で見たよ……」

市毛がすっぱぬいた。

「尾も白くない、か！ なかなかおもしろいじゃないですか」

バーテンが七杯目のハイボールを、壬生源太郎のほうに押しやりながら、含み笑いをした。

「ねえ、きみ！ 学校の教師なんて、本当につまらない生活だぜ……」

壬生はコップに口をつけながら、大きな声で言った。

「よせよ、おい！」

市毛一夫は慌てた。

二人とも高等学校の教師をしていたのである。それも私立の男子高校だった。はっきりいうと、公立の高等学校を退学させられた、不良ばかりが集まっているような、私立学園だったのである。

「なぜだい？」

「勤め先の悪口を言うのはよせ」

「悪口じゃない。本当のことを言うだけだ」

「それをよせって言うんだ……」

「おい市毛。お前も、ペコペコ型に転向したのか？」

「そうじゃアないけど……酒を飲んでいるところではよせ、というんだ」

「かまうもんか」

「俺は困るよ。やめてくれ」

「そうか」

壬生源太郎は、じろりと同僚の市毛を睨み据えていたが、黙りこくってまた琥珀色の液体に口をつけた。

「なにか、あったのね、今日——」

マダムがわけ知り顔に言った。

壬生も市毛も、学生時代からの常連である。

二人とも、酒は強いほうだった。

「そうなんだ。ちょっと、不愉快なことがあってね」

「へーえ」

マダムは壬生の男性的な風貌を、うっとり眺めた。壬生は毛深い体質で、指の先まで黒い毛が生えている。それを見ただけで胸毛の硬さが想像できるようであった。

「壬生が生徒をぶん殴ったんだ……」

「まあ。暴力をふるったの？」

「そうさ」

市毛が声をひそめるのを、壬生源太郎は不愉快そうに眺めて、

「実地教育さ！」

と言った。

「まあ……なぜ？」

「こいつの受持ちの生徒が、よその高校の生徒を集団でリンチしたんだよ」

「まあ……」

「理由をきくと、ガンをつけたってやがる！　まるで愚連隊だよ！」

壬生は吐き出すように言った。

「大変な生徒たちねえ……」

「本当に大変な生徒たちさ。暴力教室の生徒だよ……」

市毛は、つくづくと恐ろしそうに肩をすくめた。教師のほうが、生徒から脅迫され、小さくなっているような学校だったのである。

「荒療治しなけりゃだめさ。PTAを怖がってたんじゃア、いい学校にはならん！」市毛は苦笑した。

事実、悪いのは数人の生徒だけだった。しかし、その悪い生徒の父親が、区会議員であつたり、PTAの役員だつたりするのだから、始末がわるい。

「人を殴ると気持ちがいって言うんだよ、そいつは——。だから、殴られるということが、どんなに痛くて嫌なものか、教えてやろうと思つたのさ……」

壬生源太郎は一気にコップを飲みほすと、低い声で、
「お代わり！」と言つた。

2

「俺は、学校をやめる」

「やめて、どうするんだ……」

「ほかに就職口を捜すさ」

「学校はいやか？」

「ああ、俺の性分に合わん！」

「だったら仕方がないなあ」

市毛一夫は苦笑まじりに、相手の肩をたたいた。どんなときでも弱音を吐かない壬生だった。その壬生が勤めをやめる、というのだから、よほど考えた末のことに相違ない。

「今夜、辞表を書く」

「ええ？」

市毛は驚いた。

「明日、やめるのか？」

「ああ。悪い生徒をなぐって、PTA会長に文句を言われたんじゃア、学園の明朗化はできんよ」

「それはそうだが——」

「第一、校長がいかん！ 教育愛はひとかけらも持っていない」

「そうかなあ」

「そうだよ。ソロバンだけで学校を経営されて、たまるものか」

「しかし、われわれの月給は……」

「生徒の父兄が払ってくれる、というのか？」

「そうじゃないか、現実には——」

「だから困るんだ。俺の殴った生徒は、いみじくも言やがった……」

「なんだって？」

「僕を殴ると、後悔しますよ、ってね」

「そのとおりになったじゃないか」

「俺は自分のやったことは、正しいと思っている」

「しかし、暴力はなあ……」

「暴力には暴力さ。目には目を、齒には齒を、だよ……」

「仕方ない奴だなあ」

市毛一夫は財布をとりだしながら、とろんとした目付きで、

「おい。勘定」と呼びかけた。

カウンターの隅の、中年の紳士と話しこんでいたマダムが、笑いながら言った。

「あら、勘定を払ってくださるの？」

「ああ、払うとも。少ないが、ボーナスが出たんだ……」

「そう。でも、今夜はいいのよ」

「ええ？」

「こちらのお客さまがね……」

マダムは、カウンターの隅で、ビールを飲んでいる紳士を手で示して、

「奢^{ちか}ってくださいるんですって……」

と言った。

「奢る？」

壬生源太郎は、驚いたように、紳士を見つめた。

「そう。儲^{もち}かったでしょ？」

「いやだよ。奢ってもらういわれはない」

壬生は言った。

「そう堅いこと言わなくても、いいじゃないの。そうでしょ？」

「いやだよ、マダム！ だったら、俺が払うよ」

壬生源太郎は一万円札をとりだした。

「失礼だが——」

紳士が、笑顔を二人に向けた。

こんな高円寺あたりの、安酒場には不適當なような人物だった。第一、服裝が上品すぎる。ソフトがよく似合うタイプだった。

「なんですか」

「実は、あなたがたの話をきいていて、非常におもしろかったのですよ」

「おもしろい？」

「ええ。とくに、壬生さんの話がね」

「いつ、僕の名を——」

彼は目を据えた。

「そりゃア話のあいだに、いろいろと出て来ますからね。壬生さんと市毛さんだ……。すぐ覚えれる」

壬生源太郎と市毛一夫は顔を見合わせた。なんだか、その紳士に食われた感じである。

「私も若いころ、悪事を働いている上司を、みんなの前でぶん殴って、辞表を書いたことがあるのですよ。ハッハッハ」

「ははあ……」

「いまの若い人には、そんな骨のある連中にはいない、と思っていた」

「ははあ」

「ところが壬生さんは、どうやら、わが党の士らしい。違いますか？」

「いやァ……僕の場合はちょっと……」

「まァそれで、失礼だとは思ったが、今夜は気持ちよく飲んでいただこうと——」

「なるほど、そうでしたか」

市毛一夫は大きく頷いて、へどうする？ というように、壬生のほうをみた。壬生源太郎は首をふった。

「お気持ちにはありがたいが、自分のことは自分でします。こうした飲み屋の勘定をためて払わない奴、右側通行しない奴、選挙に行かないで不平をいう奴、女の手切れ金にけちけちする奴、爪垢をためた奴……僕はみんな嫌いなんだ。奢られるのも嫌いです」

「まァ、壬生さん！」

マダムが呆れたように言った。

「いいんです。ここの勘定は、不肖壬生源太郎が払います」

「おもしろい！ 気に入った！」

紳士が叫んだ。

壬生はじろりと相手をみて、

「気に入ってくれないほうが、気が楽です。さあ、市毛……行こう！」
と言った。

かなり酔っている自分を知っていた。だから、失言しないうちに、引き揚げようという気持ちもあつた。

「ちょっと、待ってください。私も男だ。言いだしたからには、ここの勘定は、私に持たせてもらう。その代わり、どこかもう一軒つきあって、ビールを奢ってもらおうじゃないですか——」

「よからう。いいな、壬生？」

市毛は、飲み足りないのか、そんな紳士の提案にっこり笑顔をつくった。あとで考えたら、このとき市毛が賛意を示さなかったならば、壬生源太郎の人生は、どう変わっていたかわからない——
！。

3

へウム……飲み過ぎたな……

頭が、がんがん鳴っていた。完全な二日酔いである。

壬生源太郎は、枕元を手さぐりした。いつものところに、いつものように、マホウ瓶がおいてあった。

へなん時だろう？

枕元の置時計を見ると、七時四十五分であった。どんなに酔っていても、その出勤時刻になると目が覚めるのだから、サラリーマンの習性とは恐ろしい。

起き上がって、マホウ瓶の中の水を飲み、首を左右に倒して頸骨を鳴らしているとき、机の上の白い封筒が目についた。

——辞表である。

へそうか……。昨夜、変な男に、連れて行かれた料理屋で、辞表を書いたんだ……。俺は、学校をやめるんだ……。>

そう思うと、壬生はまた不意に眠たくなってきて、また布団をひっかぶった。

一年九カ月勤めた教師生活だったが、彼は未練はなかった。自分から私立の、そうした暴力教室のような高校を選びながら、やめるとはだらしない話である。

しかし彼は、自分の手で、生徒を良い子に指導できると、過信していたのであった。だが禍根は、生徒ではなく、生徒の家庭であり、私立学園の経営という意外な分野にあることが、ようやくわかったのである。

へまあ、いいさ！ 二年ぐらい、道草をくったって、どうっていうことはない。人生は長いんだ……>

壬生源太郎はそう思いながら、いつしかとうとうと寝入ってしまった。彼が目覚めたのは、正午近くだった。アパートの管理人のお婆さんが、